マスクが分断する二つの世界

LI校　高等部二年一組

豊田　夏稀

二〇二〇年、コロナウイルスが僕たちの世界を一変した。このウイルスは、平和で気の緩んでいた僕たちの間であっという間に広がり、世界中で多くの人が感染し、多くの人が亡くなった。人々は家から出られなくなり、仕事は激減、学校は閉鎖されオンライン授業となり、レストランもそのドアを閉じた。唯一の楽しみと言えば、オンラインで友達とするゲームくらいだ。僕の家族も大きな影響をうけた。父の仕事はすべてキャンセルされ、姉は大学から戻ってきた。母の仕事もオンラインになり、家族全員が家の中で息苦しさを抱えながら、何とか支えあった。僕が生きてきたこの十六年間で、こんなことは初めてだ。それはきっと誰もが思っていることだろう。コロナウイルスというこの大きな壁を僕たちは乗り超えることができるのだろうか。

毎日ニュースで伝えられる感染の拡大。その中で僕が今一番感じていることは、アメリカが二つに分かれてしまっているということ、すなわち「分断」だ。その一つの例として挙げられるのは「マスク」。マスクをつけることで、自分が感染しないだけではなく、感染しているかもしれない人がほかの人にうつすのを防ぐことができる。日本人はマスクに慣れているが、アメリカでは今までマスクをつけている人など見たことがなかった。それでも多くの人が感染の恐怖からマスクをつけた。初めは異様な光景だったが僕たちはだんだんと慣れ、安心感を得られた。けれど同時に、それと逆行することが起き始めた。マスクをつけない人が店内で注意を受け、怒りで注意した人間を銃で撃つというショッキングなニュース。次々とＳＮＳで伝えられるマスクをつけたくない人間による攻撃的な行為。なぜなんだ。どうしてなんだ。マスクをつけるのはそんなに嫌なことなのか。僕はこんな

人たちが存在することが信じられなかった。僕はその人達の考えがどうしても理解できない。自分さえよければ、他の人たちがどうなろうと関係ないのか。

ただ、一方でマスクをつけない人たちにもそれなりの理由があるのかもしれないとも思う。もしかすると、マスクの利便性を知らないのかもしれない。もしかすると、持病や何かの理由でマスクをつけることができないのかもしれない。もしかすると・・・。けれども、僕を含めた多くの人たちは、マスクをつけていないという事実だけで、その理由や話を聞こうとする気持ちがない。このことが、人々の中で「分断」を生んでいるのではないのか。

また、コロナウイルスの発生源が中国だといわれたことで、多くのアジア系の人が差別を受けた。アジア人という見かけだけで、全く知らない通りすがりの人から、罵倒されたり暴力を受けたりしたという。一体これは何

なんだ。冷静になって考えれば、アジア人のせいではないし、ましてや誰のせいでもないだろう。誰かのせいだというのなら、ウイルスを甘く見ていた僕たち人間全員のせいではないのか。いつから僕たち人間は、自分のことしか考えず、悪いことをすべて誰かのせいにするようになったのだろう。「自分さえよければ」という考えは、人々に分断を生み、争いを生む。それは、長い人類の歴史から学んできたことではなかったのか。

僕たち人間は、一人で生きているのではない。社会という大きな輪の中で共存することを選んで生き延びてきたんだ。今の世界は、そのことを忘れてしまっているのではないだろうか。世界という大きな社会の中で生きている限り、そこで一緒に生きる人のことを考えて行動することこそ、自分自身を守る最大の方法だと僕は思う。自己中心主義を捨てて、人々が同じ方向を向いて団結しない限り、僕たちはこのウイルスに打ち勝つことができな

い。そのことを忘れずに一歩一歩前に進まない限り、いずれ人類は絶滅するだろう。今、僕たちは試されている。分断か、共存か。そしてコロナウイルスが僕たちに問いかける。

「あなたたち人間は、私たちウイルスとも共存できるのか。」と。

歴史と日常生活

W校　高等部二年

佐々木　星乃

私が私自身の人生を考えた際に、これまで、なぜこの教科を勉強しないといけないのだろうと解せない教科がいくつかあった。その最たるものが、私の一番苦手とする教科「歴史」だった。確かに先人の知恵、成功と失敗、を学ぶことに意味はあると思う。過去の成功例を参考にしたり、彼らと同じ轍を踏まないで済むからだ。しかし、私は歴史を学ぶ個人的な意義をずっと見いだせずにいた。学校で複数の教科のテストが同日にある際、歴史の勉強を後回しにし、テスト当日の朝に始めるほどだ。

コロナウイルスの話は、1月に海外出張から帰ってきた父が口にし始め、それは、単に夕食時の話題の一つに過ぎなかった。ロックダウンをした中国武漢の街には心を痛める。もし自分が身を置くといかに困難であろうか、

想像を絶する出来事であった。そのニュースに心を痛めながらも、それは、遠い中国の国内問題だった。私の暮らしているアメリカには関係のないことだと思っていた。高校の部活として、スキーをする為に雪山にバスで向かっている際、友達と「中国でウイルス感染が起こっているし、日本も近いから危ないかもね」と軽く話す程度だった。ところが、２月に入って、突然身近なニュースになり始めた。アメリカで数人のコロナウイルスに感染したと思われる事例がニュース番組で取り上げられたり、学校でも話題に上がるようになったからだ。

それから、私の通学する高校がロックダウンをし、完全リモート授業を開始するまで然程時間はかからなかった。

ニュースで見る深刻な出来事が、私の生活の半分を占める学校生活に実際に影響を与える。そればかりでなく、日本やアメリカの私の大切な友人のみならず、家族、親戚まで、

ひいては私自身や一緒に住んでいる家族の命さえもリスクに晒しうる出来事と伝播、拡大してゆく。これは、数ヶ月前に友達と「早く私達の学校もロックダウンをすればいいのにね」

と話し、軽視していた状況と今は全く違うと、痛感させられる。

これまでもこのような出来事を経験したことがあるか両親に聞いたが、これほどのことはないと言われた。

それから、このようなことが両親が誕生する前、人間の歴史上に前例があったのかを調べた。

驚くべきことに、人類の歴史で、疫病で大きな人口が失われることはさほど珍しい出来事ではなかったそうだ。近いところでは、二十世紀初頭のスペイン風、その前では、十五世紀のペスト、突然起こった疫病で世界人口の二割～三割まで失われる出来事もあったようだ。これらの疫病は先人達の努力と研究に

よって感染拡大を抑える方法を見つけ出したり、治療法が確立されたりしたようだ。

一方、私達は、未だ今回のコロナウイルス感染症の解決策を見出していない。医学的なアプローチだけでは解決できない大きな事象となっている。今後更に難しい事態が世界的に生じる見方も多く出ている。しかしながら、先人の経験、歴史に学ぶことにより、この災禍からの脱出方法を見つけることができるのだと信じるようになった。

そこにこれまで、学ぶ意義を見出してなかった歴史に大きな知恵があるのだと理解できるようになった。今まであまり積極的に勉強をしようと思わなかった歴史に興味が湧き、両親に質問をしたり、自分で調べたりするようになった。

これからも、この家に引きこもり、外出を極力避けなければならない、一年前では思いも寄らなかった生活を続ける必要がある。しかし、ここでこの先しばらくは何も楽しみの

ない、閉鎖的な辛く寂しい生活を自分自身で変えていくことが大事だと思う。家に長く居るからこそ出来ることを見つけたり、家族との時間を今まで以上に楽しく大切に過ごすにはどのようにしたら良いのだろうと考えを巡らせてみたり。案外この生活は悪くないかもしれないと思えるように努力しようと決意した。

人間万事塞翁が馬ということわざがあるように、この困難を私自身の成長につなげてゆきたい。さらなる飛躍を目指して、努力することを惜しまない人間になろうと決心した。

時間という宝石と日常という灯

W校　高等部一年一組

井澤　幸平

二〇二〇年世界中に広がったウイルスCOVID19により世界各国は外出自粛命令を出しました。この自粛期間中、僕は有り余るほどの時間がありました。その膨大な時間の中、僕は延々と自問自答を繰り返し、色々な質問に自分なりの答えを思いつき、また答えに辿り着けませんでした。自分に関するような質問はあまり答えにたどり着けませんでしたが、それ以外の質問は多く答えることができました。その内一番時間を費やしたのは時間とは何かと日常とは何かという哲学的な質問でした。

時間とは何か、日常とは何か。そう聞かれると明確な答えはなかなか出て来ません。例えば小学生に聞くとします。小学生は恐らく時間はただただ過ぎていくものだと答えるでしょう。そして日常は当たり前、あって当然

なものと答えるにちがいありません。人間はこの二つの曖昧な概念の定義を中々考える事はなく、はっきり答えることのできる人はあまりいません。二つとも人生には必ずありますが、実感することはめったにありません。

僕はこのコロナという災害の中、自粛中に「時間とは何か」という疑問に一つの答えを見出しました。辿り着いた結論は「時間とは輝く宝石の様なもの」だということです。一見この二つのものの共通点は見つかりません。ですが、この二つを細かく比べるととても似ています。宝石とは高価なものであり、売れば相当なお金が手に入ります。そして時にはその価値が上がり、その宝石に掛けられる金額は高くなります。時にはその価値は下がりその宝石に掛けられる金額は下がります。時間とはこの現象にとても似ています。時間とは永遠に止まることなく流れて行き、昔から人間に寄り添い、様々なチャンスや成功をもたらすものです。時間は使い方により、

その使った分の時間の価値が決まります。効率良くやるべきことをやればその時間の価値は上がり、無駄にするように好きなもののみをやっているとその時間の価値は下がります。まるで宝石のような大切な時間は、沢山あるにも関わらず、過ぎ行くスピードはこの世のどのような生物や物体より早くて、気付いたらもう無くなっているのです。この世のどのような高価な財産よりも価値のある、時間というものの本当の価値を、僕はこの自粛中に身に沁みて感じました。

自分なりの自問自答でたどり着いた「日常の定義」とは「そっと寄り添ってくれる灯の様なもの」です。「日常」と「灯」というこの二つを関連付けることは一見意外なことかもしれません。しかし、「灯」と人間の関係性を考えてみてください。灯とは常に色々な形で人に寄り添っています。大昔の人類の歴史にも灯はあり、人類の進化にも繋がりました。人類は灯と共に進化し、人間は日常と共に成

長します。今では灯はあって当たり前で、ないことはあり得ないようなものです。その重要性はギリシャ神話でも強調されています。「プロメテウスの火」というとても有名な一節では、天界随一の頭脳を持つと言われていたティタン族のプロメテウスが、人間に炎を与えて彼らの進化を促進させた事で、全知全能のゼウスが怒り、彼を山に鎖で止め、鷲に彼の内臓を食べさせたとあるほどです。炎という灯の重要性が伝わります。日常とは灯のように人間の隣に寄り添っており、当たり前な存在です。日常は人間の毎日であり、常に寄り添っている目に見えない灯のような存在です。人を成長させ、見守り、背中を押してくれる存在。ただ、そんな日常も突然なくなることもあります。炎が発する灯も勢いの強い風により消えるように日常も色々な種類の妨害によって消されます。例えば戦争や病、または自然による災害。人類の歴史上にも数回このような事態が起きており、多くの人の

「当たり前」が奪われました。見かけ上、共通点のない二つのものも、深く掘れば掘るほど共通点が見つかります。日常という灯の儚さ、そして重みに開眼しました。

この長い自粛期間中、僕は二つの哲学的質問に自分なりの答えを発見できました。今まで深掘りしなかった領域に踏み込め、新たな自分を発見できました。このコロナの自粛は大きなチャンスだと思いました。時間という財宝を有効活用し、自粛期間前より強く大きな自分に成長できたと思います。

子供ができること

LI校　中等部三年一組
ベンソン　アレックス

新型コロナウイルスは世界を変えてしまった。現時点では約八十万人もの人が亡くなり、世界中の人が自粛をしている。コロナ関係以外の業種は不景気となっていて、新型コロナウイルスによって数多の人が損をしている。また、人と接するイベントや計画は全て禁止となり、インターネットを使って間接的に会えるとはいえ、人と直接会うことはなくなった。そんな中、僕たち子供は自粛し、早く新型コロナウイルスが終息することを祈ることしかできないままでいる。何か新型コロナウイルスに対して子供ができることはないのだろうか。

僕が考えたところ、子供ができることは三つある。まず、一つ目は周りの状況を知るということだ。例えばテレビでコロナについてのニュースが流れている時に、聞き逃がすの

ではなく、しっかりと見たり、自主的にインターネットを使ってコロナについて調べたりすることだ。そして、感染者数や亡くなった人の数は単なる数字として見ないで、その意味と怖さを考えてほしい。心配のしすぎはいけないが、危機感を持たないことが一番危ない。第一波が終わっても第二波、第三波来たりするため、決して油断をしてはいけない。

二つ目は自分の状況を知るということだ。子供の致死率は低いからと気を緩めてはいけない。周りの人を感染させる可能性、低いといっても自分が死んでしまう可能性があるからだ。少しでもコロナに感染したかもしれないと思ったら直ぐに検査を受け、健康な生活を送り、できるだけ外出を避けることが自分、そして周りを守ることになる。感染者の多い所に行くのは自殺行為、そして感染者の少ない所に行くのは殺人行為ということを念頭に置かなければならない。

三つ目は「伝える」ということだ。自分と

自分の周りの状況は現在だけではなく、将来に活かすことができる。なぜこんなにも世界が混乱したのか考えてほしい。それは準備がされていなかったからだ。新型のウイルスが発生したとの情報が流れてからではなく、爆発的に感染が広まってからマスクや自粛などの対策を始めたからだ。そして、次のパンデミックもいつか絶対にくる。歴史を見ても人類は新しいウイルスと常に戦い続けているし、これからもそうだろう。そして、次のパンデミックで戦うのは今の大人ではなく、今の子供、そして未来の子供だ。今のうちに僕たちがどれだけ準備ができるか、そしてどれだけ次の世代に伝えることができるのかが何十万、何百万もの命を左右するだろう。

この作文で書いたことを全て知っていたという人も沢山いると思う。だが、知識とはどれだけ貯めるかではなくどれだけ使えるかによって価値がつくものだ。これを機に、コロナが世界に及ぼした影響、そして「自分は大

丈夫」という考えを見直して見て欲しい。準備を怠らず、全世代で助け合う世界にしよう。

変化を必要としている世界と私

W校　中等部三年一組

是永　真凜

オーストラリアの火災、第三次世界大戦に発展しかけたイラクの事件、そしてコロナウイルスのパンデミックなど、今年は悪いことばかりだと人々は言うかもしれません。しかし、私たちはこの世界がどれだけ変化する必要があるかを学んだと思います。

五月二十五日に、ある警官が警察署の方針に違反し、四十六歳のジョージ・フロイド氏の首に乗っかり、呼吸をできなくしました。フロイド氏と見物人が助けを求めていたにもかかわらず、八分四十六秒の間首の上に乗り続け、病院に行った一分後、彼は死んでしまいました。黒人に対する警察の残虐行為は、これが初めてではありません。二百年前から起こっていました。ただビデオで撮影されていなかったのです。この事件を知って、世界中の人々がショックを受け、警察の残虐行為

に抗議し始めました。次々と他の行為のニュースが共有されていきました。ブレナ・テイラー氏は自宅で警官に九回撃たれました。これをした三人の警官のうち二人はまだ逮捕されていません。十四歳の少年タミール・ライスさんはおもちゃの銃を持っていただけなのに、警官は彼を撃つために一秒も待つことはありませんでした。五月二十五日以降、警察による暴力事件は百四十件発生しています。私たちが黒人への差別が起こっていることに気づくのは遅すぎましたが、多くの人々が黒人の権利のために戦うために、これほど前向きになったかは素晴らしいことです。人々の権利は私たちが議論するものであってはなりません。

コロナウイルスの広がりにより、私を含め多くの人たちは三月半ばから自粛生活にはいりました。コロナウイルスが騒がれ始めた時に起こったのは中国人への差別でした。普通のアメリカ人は中国人も他のアジア人も区別

ができないので、同じアジア人である日本人に対しても差別が始まりました。

学校では、コロナウイルスの流行が拡大した後、多くの人々が私たちアジア人に責任を追求しました。私の友人の多くは、決して呼ばれるべきではない呼称で呼ばれる人種差別を受けました。私たちがそれについて言い返したら、彼らは

「ただの冗談だったんだよ」

と簡単に言い訳をしました。これは私にとっては新しいことではありませんでした。こんなことを私が言われたとしても、別に普通だと思っていたと思います。なぜなら私も前から同じようなことをされていたからです。私が六年生の時、二人の男の子が私の前で、目を引き伸ばして、狐の目に見えるように笑いました。よくあるアジア人に対する人種差別です。私たちは長い間沈黙してきました。でも、このコロナで世の中が一変して以来、多くの人が自分の声を見つけて使い始めたと思

います。一つの例は、私の友人が知らない人からテキストを受け取ったときでした。「チングチョングリングロング」と書かれていました。最も悲しいのは、このような仕打ちは私たちのコミュニティにとって特別新しいものではなかったということです。どうやったらこのようなひどい人種差別主義者になることができるのだろうかと私は思いました。私と友人は、彼がいかに失礼で人種差別主義者であるのかについて彼にメッセージを送り、そしてそのことを学校の校長先生に報告しました。自分の学校の人やソーシャルメディアの人が過去に受けた人種差別の経験について話し、そしてそれらの人種差別が彼らに対してどのように正常化されたかについて話しました。Black Lives Matter 運動は、人種差別を受けた人が立ち上がるためのきっかけと力を与えたと思います。私と現地校の友達は、人種差別や同性愛恐怖症などの学校での多くの問題と戦うために、この自粛期間にその問題

について投稿するサイトを作って、皆の意見を集める場を作りました。私たちの目的は学校で起こるヘイトスピーチを発する人に、自分の言葉に責任を持たせて、学校を安全な場所にする事です。これを始めてから一ヶ月もたっていないのに、八十以上のケースを提出してもらっています。私と友達は学校が再開したら自分たちで高校のクラブとして活動を始めようと思っています。

衣料品・ファッション店でもこの過去数カ月でいろいろ学びました。一つのお店は、アメリカで人気のアーバンアウトフィッターが一つです。その店は、摂食障害を促進しているTシャツや、ホロコストのユダヤ人の来ていた服をあざける服を販売していることが一ヶ月前に分かりました。そのために、たくさんの人は店をボイコットしています。私はこんなお店で買い物したなんて信じられません。私はこのコロナによる隔離の間に、ファストファッションについても多くを学びまし

た。ファストファッションとは、安価で質の悪い使い捨て衣類の大量生産です。ファッション業界は年八百億にのぼる大量の衣服を作り出します。これは地球上のすべての人にとって必要な衣服の十倍を超えるものです。そして、それは二十年前に生産されたものより四百パーセントも多いのです。一番驚いたことは労働者のお給料です。バングラデシュでのファストファッションで労働者の賃金の平均は一時間でたった三十三セントです。こんなお金だったら、週六十時間働いていても生活に苦労するかもしれません。ファストファッションに関するこのような情報を持つことは不可欠ですが、それを変更するために何かをしなければ、何の価値もありません。それでは私たちは何をしたらいいのでしょうか？一番簡単な方法は、買うものを減らすことです。物を買うとき、私たちは賢い買い物客になり、倫理的なファッションを探す必要があります。多くの友達と私がやっているのは、

古着の買い物です。グッドウィルやセーバーズに行って、他の人がいらなくなった服を買います。中古品を購入することは、資源を再利用し、世界的な繊維需要とそれに続く廃棄物の減少に積極的に貢献することを意味します。私は今までは、何でも新しいものがいいと思っていましたが、これからは今あるものや、中古の物などを利用して地球上の有限の資源を大切に使っていくことが世界を助けるための一歩だと思います。世界の多くの人もだんだんとそれに気がついてきていると思います。

この四ヶ月は、世界の重要な問題に目を向け、多くの人々を団結させる助けとなったと信じています。人種差別との闘いから地球を救う手助けまで、二〇二〇年は私たちに多くの希望を与えました。いまだにコロナという未知のウィルスの脅威の真只中ですが、この期間は、私たちがこれらの人生を変える多くの出来事を振り返り、新たな行動を起こす一

歩となる大切な時間であったと感じています。

ロックダウンの中で

w校 中等部二年一組 井手諒

今、コロナウイルスは十億人もの人を家に閉じ込めているそうだ。人々は、レストランなど気軽に行く自由や、友達と共に公園で遊ぶ自由を失ってしまった。日本全体が待ちかねていた東京オリンピックも延期され、僕が楽しみにしていた日本の旅行の計画もすべてなくなってしまった。

しかし、多く自由が失われた中で、僕は逆により自由になれたように感じる。

コロナウイルスは、世界中の人々にとって災難であった。二〇二〇年というと、なんか良いことが起こりそうな年だと年の始めに思ったが、まるで違っていた。

コロナウイルスの話題が最初に広まった頃は、僕はまだ学校にいた。学校の友達、そして仲間達もみなインフルエンザみたいにそれほど深刻なことではないと思っていた。しか

し、時がたつと感染者の数が急激に増加し、校長先生が学校での授業を取り消すと発表した。僕を含めた生徒全員が喜んでいた。しばらくの間、僕はとても気楽に暮らしていた。別に学校からのオンライン課題はそれほど難しいわけではなく、遊ぶ時間はたっぷりあった。僕は毎日遊び尽くした。正直いって、少し遊びが退屈になったくらいだ。

最初は、学校は二週間だけ休みになる予定だった。しかし、状況が深刻になるにつれ、再開は何回も延期され最終的には三月以来学校の授業を一度も受けずに終わってしまうことになった。最初は甘く見ていたコロナウイルスだが、ニューヨークはやがて世界最悪の汚染地帯だったとニュースで聞くと、僕でさえその深刻さを理解した。

僕と同じく、両親も通勤しなくなり家で仕事をするようになった。それからしばらくして、父が料理を身につけてみないかと提案した。僕は日本の学校に三ヶ月しか行っておら

ず、当然家庭科の授業を経験していない。料理の仕方はこれ以前ほとんど知らなかった。料理はいつか身につけなくてはならないスキルだったので、試しにやってみようと考えた。

最初は、包丁に慣れる練習として、リンゴを切る程度の簡単なことから始めた。時間がたつと野菜、チーズ、肉を切り、そしてそれを焼いたパンにはさんでサンドイッチを作れるようになった。今は、フライパンを使いベーコンなどを焼いて特製サンドイッチを作ることも簡単にできるようになった。去年と比べると大きな進歩である。自分の食べ物を作ることの良い点は、自分の好みに応じて、自分の好きな具だけを使えるという点と、自分で食べ物を作り実際に食べてみるとなぜかおいしく感じられる点である。

料理を初めて身に着けたことに加え、僕は毎日の生活もより良い方向に変えられないかと考えるようになった。毎日遊び尽くすのは一日の無駄だと感じるようになり、僕は父の

助けを借りて広く知識を身につけることにした。今のペースで行くと、今までであまり集中していなかった科学を完全に理解できて、そのうちに高校の数学を半分以上理解できるだろう。

毎日の感染者が減ってゆき、外に出ることが許されるようになると、兄と散歩を毎日するようになった。家にこもっていると、筋肉が衰えてしまうので、身体を少しでも動かさなければならないと考えた。僕が入っているサッカークラブが再開する前も、これまで以前より十倍外に出るようになった。

コロナウイルスがアメリカ中に広がっていなかったら、このような前向きな変化が起こることはなかっただろうと僕は思う。前は、毎日学校に行き、授業を受け、宿題や自習をし、サッカークラブに行く、という繰り返しに過ぎなかった。同じことを繰り返して何とかなるなら、無理して生活を変えるなんて面倒なことは思いもよらない。

なぜ、このような不自由な時に生活がこれほど変わったのだろうか。コロナウイルスが広がっている環境の下、自由な時間が作られた。外出は自由にできないものの、家での生活はものすごく自由になった。自分の行動について考え、決めるための時間がより多くなった。余った時間の中で何をするかしたいかを考え、そしてそれを実際にやるという自由ができた。ある意味、外出を気軽にできないこの不自由な環境が、生活の改良を可能にする自由を作り出したと言える。

僕はかつて、少しでも時間があればその時間を遊びに使おうと考えていた人間だった。散歩などわざわざ面倒なことをせず、もちろん料理の知識はほとんどなかった。けれども、コロナウイルスが広まり学校が休みになり、自由時間が作られたおかげで、僕は人間として成長することができた。

今では、僕のコロナウイルスの感想は三か月前とは大幅に変わっている。ほとんどの人

々は、コロナウイルスは人間を不自由にする害悪だと考えているだろう。一面でそれは正しいが、違う面で見るとそれは浅い考えである。今の世界をよく見てみると、以前生きていた世界とは少し違うものに変わりつつある。

インターネット上でのコミュニケーションが急激に盛んになり、ますますその改良が行われている。

ウイルスが世界中に広まるときは、ほとんどの人間はウイルスがもたらした害だけに注目し、その災難がどのように世界を改良したかを無視している。災難は、人間を真剣にさせ、考えさせる。それは人間の成長に最もつながる機会になるだろう。それは、人間に対し大きな被害をもたらしたとしても、世界を変えることを可能にしてくれる。僕たちの日常は、以前の被害から学んだ教訓が無数に込められているだろう。家に閉じこもっていた僕に料理の仕方を教えてくれたように。

20×20

地球からのメッセージ

LI校　中等部一年一組
槇原　尚紀

今年はコロナのせいで、いろいろなことができません。補習校の初等部の卒業式、そして、現地校の六年生の終業式もありませんでした。東京二〇二〇年のオリンピックも行われませんでした。楽しみにしていたスペインでのサッカー・トレーニングにも行けませんでした。本当に残念でした。フォートナイトというビデオゲームのワールドカップもキャンセルされてしまいました。ぼくはそのトーナメント出場のトライアウトに挑戦することにしていたので、毎日セルフ・トレーニングをしてスキルを上達させるために頑張っていました。

コロナで一番つらいのは、友達と会えないことです。放課後に友達と公園でサッカーやフットボールをしたり、ピザ屋さんにいったりするのがとても楽しかったです。でも、コ

ロナ対策の外出制限でそれができなくなって、今では思い出になってしまいました。時々外に出る時も、マスクをして人との「社会的距離」を保たなければなりません。僕はマスクは息が苦しくなるので大嫌いです。まるでコロナにかかってしまったような気がしてたえられません。マスクしてスポーツをするのも嫌です。でも、ぼくは弟がいるから、ラッキーな方です。一人っ子だったらさびしくてたまらないと思います。

　コロナのせいで、二〇二〇年だけではなくて二〇二〇年代が台無しです。多くの人達が仕事をなくしてしまいました。たくさんの小さなお店がつぶれて、大きな会社も縮小しています。今年の大学卒業生は就職がすごく難しいです。コロナショックとよばれ、世界経済が大変なことになっているのです。ワクチンが開発されて、それが世界中に普及しても、世界経済が元にもどるまで時間がかかると言われています。それは今年や来年で簡単にも

どるものではありません。一九三〇年代の世界恐慌についての「大恐慌」という名の本を読んだ事があります。大恐慌では多くの人が苦しみました。経済危機の後バランスをとりもどすのは長い時間がかかります。お父さんが経済学の専門なのでそれについて教えてくれました。

　コロナのせいで学校は閉められ、遠隔授業になりました。最初は学校が休みになってよろこんでいたのですが、遠隔授業が続くにつれて友達といっしょの学校生活がこいしくなりました。でも、四か月間の遠隔授業を振り返ると、いい面もあることがわかりました。まず、授業中のストレスが少ないと思います。先生にいつも見られているのではないので、すこしリラックスして、窓の外をみたり歩き回りながら数学の問題を解いたりできます。そうすると、もっと頭の回転がよくなっていい文が書けたり、いいアイディアが浮かんできたりします。昼休みも勝手に長くとれるし、

朝寝坊しても大丈夫です。好きな時間に学校の課題をすればいいのです。難しい課題や面白いプロジェクトにはもっと時間をかけることができます。例えば社会科の古代ローマの民主主義についてのプロジェクトをしたときは、くわしく本を読んだり、ドキュメンタリーを観たりしてじっくり考えて完成させることができました。通学に時間をかけないですむし、自分の時間が増えたと思います。

コロナ対策での都市ふうさや外出制限にも、いいことがあります。人間や工場の活動が少なくなったおかげで、外は静かです。ニュースで読んだのですが、動物たちが町に出てきているそうです。人間たちが自分勝手に彼らのすみかをうばってしまったので、取り返しに来てるような気がします。人間たちの活動が減ったから、汚染や公害、特に温室効果のある二酸化炭素の排出量が減って、地球温暖化が減速されていると言われています。地球全体からみたら、そして人類全体から見

たら、コロナショックはもしかするといいことなのかもしれません。僕達がもっと地球を楽しめる、そして地球にやさしくできるきっかけをつくってくれたのではないでしょうか。コロナ大流行は本当は地球からの SOS のメッセージなのかもしれません。

自粛生活

LI校　初等部　六年二組
ベンソン　明斗

三月一六日、それは運命の日でした。少し前から中国でコロナウィルスが流行っていると聞いていましたが、急に僕達の住む町にもやってきました。そして、学校がその日から休みになりオンライン学習が始まりました。最初は二週間だけと聞いていたのに、結局夏休みまでの三か月も学校に行けなくなりました。

僕は最初、学校に行かなくていいと聞いて、「ラッキー。」と思いました。でも、オンラインの方が学校に行くよりも家でするることが多く、先生もオンラインに慣れていない人もいて、授業がゆっくりでつまらなく感じることもありました。

僕は現地校よりも補習校の方が好きなので補習校は対面授業ができたらいいのにと心の底から思います。補習校の休み時間や放課後

に友達と遊ぶのが大好きです。その楽しみがなくなったのでとても残念です。でも、今の時代はオンラインゲームがあるので、補習校の友達とは毎日オンラインゲームで遊んでいます。それでもやっぱり、実際に会って遊ぶ方が百倍楽しいと思います。

自粛生活になって友達に会えないこと以外不便なのは、前のように外食ができなくなったことです。特に、僕はお刺身が大好きで何か特別な日はお寿司を食べに行っていました。でもお母さんが今、生魚は安全かどうかわからないと言って、コロナになってから一回も食べさせてくれません。

自粛生活になっていいこともありました。お父さんも家で仕事をするようになったので家族で一緒に過ごす時間が増えました。家族でサイクリングや犬の散歩をしたり、外でバーベキューをしたり、流しそうめんもしました。家の中ではボードゲームをしたり映画を見たりする時間も増えました。

もうすぐ現地校が始まります。現地校は毎日学校に通うか、毎日オンラインで参加するかのどちらかを選ばなければなりません。僕はぜん息があるのでまだ学校に通えるかわかりません。でも、僕は朝ゆっくり寝られる方がいいので、オンラインの方がいいかなと思います。

コロナが終わったら一番したいことは、友達と会って遊ぶことと、お寿司をお腹いっぱい食べることです。

ありがとうの気持ちを忘れないで

W校初等部六年一組　水野光

アメリカでは、二千二十年三月中旬に新型コロナウィルスの流行により、トランプ大統領が非常事態宣言を出しました。この非常事態宣言は、第二次世界大戦後初めて、約百年ぶりに出されたものでした。

ぼくたちの学校は、すぐに閉校しました。でも、二週間でパソコンが生徒に配られ、すべての子どもたちが授業を受けられるようになりました。先生たちは、自分たちの食べ物や必要な物を買いに行くのもやめて、ぼくたちが授業を受けられるように準備をしてくれました。

パソコンでの授業は、みんなの顔が画面に現れます。気付かない子もいるので、「あっ、しまった！」というような顔が見られておもしろかったです。また、ぼくたちが飽きないようにゲームをしたり、プレゼンテーショ

ンをしたりと、クラスのみんなと楽しく勉強
することができました。さらに、コーラスの
授業では、ひとりひとりが家で歌っているとこ
ろを録画して、先生に送信しました。それ
を先生が、みんなで歌っているように、一つ
にまとめてくれました。そのまとめた歌は、
まるでみんなで合唱しているようでした。先
生たちは、毎日、ぼくたちのために楽しい授
業をしてくれました。ぼくたちの学校の先生
やスタッフはすごい人たちだと思いました。

秋から二つのグループに分かれて、一週間
おきに学校とリモートワークになります。マ
スクをつけて授業を受けます。新型コロナウ
ィルスも怖く、うつらないように、いろんな
事に気を使わなければなりません。マスクも
息苦しいかもしれないけれど、先生や友達と
会えるので、とても楽しみです。

新型コロナウィルスが流行しても、学校の
勉強ができるように、先生たちが一生懸命考
えてくれました。

　たくさんのやさしい気持ちがぼくたちを守ってくれているのだと思いました。新型コロナウィルスで、今までの生活ができなくて、悲しくなったり、イライラしたりする時もあるけれど、多くの人のやさしさに「ありがとう」の気持ちを忘れないようにしたいと思いました。

『新型コロナウイルス感染症』について

L1校　初等部五年一組

酒巻　祐

『新型コロナウイルス』。このウイルスは世界中の人を恐怖におとしめています。世界中の経済を崩壊させ、数々の人を苦しめ、殺しています。ニューヨークでの流行がおさまりつつある今、街中を歩くとマスクをしないで歩く人、近距離で会話している人がいます。少し生意気な発言になりますが、みんな危機感がなくなってしまっていると思います。世界がこんなに危険な状況なのに、他人事過ぎると思います。なぜ自分が感染する可能性があるのにマスクしないのか、僕には分かりません。それに、自分だけではなく、他の人にまで迷惑がかかると思います。

　マスクにはいろいろな種類があります。医療用マスク「N95」、外科医用マスク、布マスク、空気弁が付いたマスクなどです。医療用マスクと外科医用マスクが一番感染拡大防止

に効果的です。空気弁付きマスクは、外からのウイルスの侵入は防ぎますが、逆に飛沫はもろに外に出てしまうので、他人のことを考えない自己中心的なマスクです。一般的に手に入るマスクでは、警察が駅などで配っているマスクが一番感染拡大防止効果的だそうです。マスクがなかなか手に入らなかった時はとても助かりました。感謝しています。

僕は今、三枚重ねの布マスクを愛用しています。夏はとても暑くて苦しく、僕は熱中症になりかけました。感染予防対策に加え、熱中症対策も両立させることはとても大変だと感じました。

マスクには感染防止にはあまり効果がありませんが、感染拡大防止にはなります。マスクをしても感染する確率は多いにあります。マスクをしてもマスクをしないと全員が感染する可能性があります。一人一人がそのことを意識してマスクをする必要があるのです。

僕が感染しないように気を付けていること

は、外では必ずマスクをし、帰宅後はまず手洗いうがいをすることです。基本的なことですが、やはりこれが一番大切なことだと思います。

いよいよ九月から現地校が始まります。僕はハイブリットを選択しましたが、とても不安です。これから寒くなるので、今度はインフルエンザの流行と重なり、クラスターが発生する危険性があります。学校の再開は、ウイルスが収束してからの方がいいと思います。

今こそ世界中が協力してこの困難な状況を打破するべきです。争いごとをやめ、一致団結して、この『新型コロナウイルス』に勝ちたい、僕はそう願います。

コロナがあたえた新しい命

W校初等部五年一組
安立 宙陽

今でもはっきり覚えています。それは三月十三日のことです。昼休み中、サッカーで流した汗をふきながら教室にもどった僕たちに、担任の先生が校長先生からのメーセージを読んでくれました。「コロナウィルスの感せん拡大のため、学校を二週間休校とします。」これからおきる恐しい出来事を想像することができなかった僕たちは、二週間の休みに喜びさけびました。あの時は、ずっと休校が続き、その まま学年が終わり、夏休みになるとは夢にも思わなかったです。

今日は七月二十三日です。アメリカの感せん者は約四百万人で、死亡者は約十五万人です。僕が住んでいるニューヨーク州では、約四十万人が病気になり、そのうち約三万二千人が命をなくしました。とてもしょうげき的で悲しいです。コロナの前と今の日常生活は

すっかり変わってしまいました。両親は、自宅きんむになり、僕はほぼ二十四時間両親とすごしています。友達と楽しくふれあうことももできず、家族みんなで行ったスーパーでの買い物は遠い昔のことですし、毎日でかける時、僕がいつも押してたエレベーターのボタンすら気軽に押すことができません。三十度をこえる暑い日、息が苦しくてもマスクははずせません。

先月のことです。身を守るためにマスクと病院で使うゴムまりくろをした父が、郵便受けから大きな白いふうとうを持って来てくれました。僕は何が入っているのか、とても気になりました。マスクをはずすと、父の笑顔が見えました。はさみでふうとうを開けたら、五、六枚の小さな黄色いふうとうが入っていました。そのふうとうには、とても読みづらい英語が手書きでたくさん書いてありました。僕はますます何が入っているのかが気になりました。

「それ何。」

僕が聞くと、父はうれしそうな声で、

「種だよ。」

と言いました。父から話を聞くと、コロナのため、家でたくさんの時間をすごさないといけないために、いろいろな植物の種を地元の図書館が無料で送ってくれたらしいです。

数日後、家の近くで土と植木ばちを買いました。植物を育てることが初めての父は、何が必要なのかわからずまよっている様子でした。四つの植木ばちに土を入れ、黄色いふうとうから小さな種を出し、一つずつきょりをおきながら僕が植えました。豆、かぼちゃ、バジル、それからちょうの大好物のミルクウィードを植えました。二・三日後、一番最初に芽が出たのは、ミルクウィードでした。小さな緑の葉っぱでした。家族全員が喜びました。

一か月たった今は、かぼちゃ、ミルクウィードと豆はつぼみが出て、花が開もなくさき

ます。バジルの葉っぱは、今日の昼で飯のパスタにのせて食べました。とても不思議な気持ちです。僕が今楽しく、大事に育てているこの植物は、コロナがなかったら生まれてこなかったはずです。たくさんの人の命をうばう恐しいウィルスですが、たった一つの良い所は、この新しい命を生みだしたことです。僕はこの命を大切にします。

オクラ先生

LI校　初等部　四年一組
川上　聖苗

五月二十一日、お父さんが、朝ごはんの時に、

「今日、種をまくよ。」

と言いました。私の家族は、新型コロナウイルスのえいきょうで、二か月以上、外に一歩も出ていませんでした。

その日の午後、お父さんが、デッキの下にあるポットを出してきました。私と弟は、栄養たっぷりの土が入ったふくろを、二人でかけ声をかけながら運びました。

「よーし、たねまきを始めるよ。」

とお父さんが言いました。二十個のポットの中に、土を入れ、オクラ、キュウリ、トマトの種をまきました。その後、お母さんがアマゾンで買ったミニグリーンハウスの中に入れ、水をやりました。

私は、昨年の夏、日本のおばあちゃんと、

畑の野菜を見に行った時のことを思い出しました。おばあちゃんも、家のとなりにある畑で、オクラを育てていました。おばあちゃんは、オクラの実は大きくなりすぎると、かたくなることを私に教えてくれました。十五センチ以上の大きなオクラがとれた時、食べてみると、皮がかたくて、食べられませんでした。オクラをしゅうかくする時は、実の大きさを見のがしてはいけないな、と思いました。

種をまいた日から、毎日午後、庭に出ると、グリーンハウスの中を一番にチェックをしました。少しすると、オクラの芽が次々にぽつぽつと出始めました。芽を見つけた時、私と弟は、デッキに向かって走りました。そして、ばんごはんを作っているお母さんに大きな声でほうこくしました。

一か月後、オクラの花が一つ、さきました。葉っぱは、お父さんの手のひらより大きくなっていました。オクラの花と実の関係はとても不思議です。私は、オクラは新しいことを

教えてくれるので、「オクラ先生」とよぶことにしました。ある日、お父さんが、外に出て水やりをしていると、なんと花が地面に落ちていました。花は一回さき、そしてしぼみ、地面に落ちた後、実が出始めることを初めて知りました。実をしゅうかくしたら、実より下にある下葉を切り落としました。下葉を切って、上にある実に栄養を送らないといけないからです。これは全部、オクラ先生から習いました。

昨年のこの時期は、日本で、おばあちゃんのオクラを食べていました。今年は、種まきから自分でけい験をしました。一番大変だと思ったのは、オクラは、二十五度から三十度の気温が必要なのに、私は、気温をコントロールできないことです。すずしい日は、この温度でオクラは大丈夫かなと心配になりました。ミニグリーンハウスに手を入れて、温かいことが分かった時は、ほっとしました。

七月二十四日、初めてのオクラの実をしゅ

うかくしました。実をくきから切った時、実の中身と同じように、ねばねばしているのを発見しました。オクラのひみつを知ることができて、私は実験に成功したような気持ちになりました。八月十五日、五十本目のオクラをしゅうかくしました。この夏、オクラ先生が、グーグルにも本にものっていない、面白いけい験をたくさん教えてくれたと思います。

大切な運動

W校初等部四年　二組
森島蘭

夏休みに入り私は毎日することを決めました。

それは、「ラジオ体そう」です。日本に住んでいるおじいちゃんは、毎朝六時半から始まるラジオ体そうを続けています。夏休みには早起きして私もいっしょに参加していました。でも今年の夏は、一時帰国ができないので、家族で毎朝ラジオ体そうをしています。

曲が始まると、リズムに合わせて体が勝手に動きます。日本人のほとんどがおぼえている体そう、こんな

ことが他の国でもあるのかなと思いました。毎日休まずラジオ体そうをしようと決めたので、お母さんがスタンプカードを作ってくれました。スタンプがたまっていくと、うれしいし、朝から体そうをすると気分が良くなります。

ラジオ体そうには第一、第二があることは知っていましたが、アメリカに来てから第三もあると知りました。お母さんの知り合いから第三体そうを教えてもらい、いまでは毎朝第一から第三までを通してやっています。ただなんとなく体そうをするのではなく、うでをしっかりとのばし、曲を聞いてリズムよく息をすっ

たりはいたりと意しきをすることで、良い運動になると思います。最初はうでがきんにくつうになりました。

ラジオ体そうは夏休みにやるというイメージがありますが、私のおじいちゃんのように毎日続けることがとても良いと思います。インターネットで調べてみるとラジオ体そうが始まったのが昭和三年でした。こどもからおじいちゃんおばあちゃんまで年れいに関係なくみんなでいっしょにできる体そうだからこんなにも長い間日本で続けられているのだなと思いました。

コロナで運動不足になっていたので私にとってラジオ体そうは大切な

時間です。きっとおじいちゃんは第三体そうのことを知らないと思うので、今度会ったときに教えてあげようと思います。私もおじいちゃんのようにけんこうな体を作りコロナに負けないようにがんばりたいと思います。

初めてのキャンプ

L工校　初等部　三年一組
村上誠悟

夏休みにマウントビーコンに初めてキャンプに行きました。お母さんとお父さんと妹と車で行きました。車で二時間もかかったのでぼくはすごくたいくつでした。

着いたらシャトルに乗って二時間半のトレールの入口におろしてもらいました。さい初の十五分でぼくはもうつかれました。登りのしゃ面がきつかったからです。

「もうつかれたよ。もう歩けないよう。」

とぼくが言いました。

16×16

それから十分たって昼ごはんを食べました。ぼくがホットドッグを食べていると、犬がぼくにすごく近づいてきてびっくりしました。犬がぼくを食べると思ったけど、本当はホットドックを食べたかったと思います。昼ごはんを食べたあと、またハイキングを続けました。

山登りはいろいろなチャレンジがあって楽しかったです。たとえば、小川をわたるとき、かえるのようにピョンピョン岩をとびうつって川をこえないといけませんでした。川の水はすごくきれいで、冷たくてサーサーと音がしました。

ほかにも、小川にある二本の大き

な太い木の橋をわたるのもむずかしかったです。ゆっくり気をつけて歩かないといけません。二本の木がゆれるからです。

「まだだちょう上じゃないの。もうつかれたようL。

とぼくは言いました。登りながら、ぼくはこう思いました。

「トカゲの手とソニックのスピードがあればいいなL。

なぜかと言うと、トカゲの手は岩にはりつくからです。ソニックは、走るのが速いからです。

ちょう上についたら、うれしくてぼくはこう言いました。

「よっしゃ。ついたね。すごくきれ

いなけしきだねL。

それから山を下りました。半分下ったらもう飲む水がなかったので、すごくのどがかわきました。キャンプ場についたら、すごくつかれて足がもう動きませんでした。

そのあとみんなでテントを作りました。ぼくと妹はねぶくろをしいて、ねころがって気持ちよかったです。

テントの中は小さなお家みたいです。テントで妹といっしょにトランプをして遊びました。

ぼくとお父さんは、バーベキューの火を作ってハンバーガーとサートもンとステーキをやきました。

ついただきますL。

16×16

とみんなが言いました。ファストフードのハンバーガーよりおいしかったです。

そのあと、ねぶくろに入ったけれど暗すぎてねむれませんでした。初めてのキャンプは、とても楽しかったのでまた行きたいです。

丸がめ

W校　初等部　三年四組

ヒューイ　にいな

わたしは、日本の会津わかまつ市にある「丸がめ」というぶっかけうどんやさんの、ぶっかけうどんが大すきです。あまじょっぱくて、すごくおいしいです。

わたしとお母さんが日本に帰ると、じいじが三回いじょう丸がめにつれて行ってくれます。じいじは、わたしがうどんを大すきだということを知っているからです。丸がめまでじいじの車で三十分ぐらいです。わたしは、いつも車の中でおなかをすかせて、「今日は何をちゅう文しよう

16×16

かな。」と考えるけれど、けっ局いつも同じものをたのみます。

わたしは、丸がめで夏でも冬でも、いつもつめたいぶっかけうどんを食べます。ぶっかけうどんに、天かすをいっぱいかける食べ方が大すきです。トッピングは天かすのほかに、ねぎとしょうががあります。わたしはからい食べ物がきらいだから、天かすしかかけません。お母さんは、ねぎとしょうがをたっぷりかけます。

アメリカの家で、お母さんがたまに、ぶっかけうどんを作ります。わたしは、お母さんが作るうどんよりも、日本の丸がめで食べるうどんの方がおいしいと思います。わたしは

16×16

つめたいぶっかけうどんが大すきだけど、お母さんはさむい時に、あたたかいぶっかけうどんを作ります。あたたかいぶっかけうどんを食べると、体が「ポッカー」として気持ちがいいけれど、やっぱりつめたい方がおいしいです。

わたしは、早く日本に帰って、じいじとばあばとお母さんといっしょにお丸がめへ行き、さい高のぶっかけうどんを、「チュルチュル」と食べたいです。でもコロナのせいで、いつ日本に帰れるのか分かりません。次にお丸がめへ行くまで、お母さんが作るぶっかけうどんでがまんします。

16×16

ほたる見た

　　六年校二年二くみ

　　はっとり　ゆずな

「ほたるが、見たいだへ。」

と、わたしはおかあさんに言いました。

「バイオリンのれんしゅうをしてから行こうね。」

と、おかあさんが言ったので、わたしとおねえちゃんの二人は、いそいでれんしうをしました。

それから、虫よけスプレーをして、マスクと手ぶくろをして、めがねをかけました。わたしは、カメラをもって、みんなでさんぽに行きました。

「ほたる、見れるかな。」

と、わたしは、どきどきしていました。おそとで前に見たとき、黒とオレンジのほたるでした。

「ほたる！。」

と、一ばん上のおねえちゃんが見つけました。

わたしは、木の近くのくらいところをとんでいたほたるを、カメラでとってみました。パッパッとみどりに光って見えました。

「やったぁ。ほたるだ」。

「きれいだなぁ」。

ほたるがたくさんとんでいて、ほたるをとってみたいなと思いました。ほたるは、

絵をかくふでの先ぐらい小さくて、ピカピカとうごいていたから、カメラでとるのは、むずかしかったです。

おうちにかえって、しんを見たら、はたるは、みどりっぽい黄色の光でうつっていました。

また、さんぽをして、ほたるを見てみたいです。

マスク

W校　二年一組
森戸　沙耶

わたしは、マスクが大きらいです。マスクをすると、いきをするのがくるしくなったり、口のまわりがもやもやするからです。はしるととてもあつくなり、すぐにとりたくなります。

わたしは、四月まで日本に帰っていました。日本に

は、かわいいマスクがたくさんあります。花がらやキラキラターのついたマスク、水玉もようやカラフルな色のマスクもありました。一ばんびっくりしたのが、つけるとヒヤ〜とするマスクです。

友だちが、ヒヤ〜とするすずしいピンク色の花がらのマスクをプレゼントしてくれました。お母さんは、

12×12

マスクにつけるきらきらしたチャームをプレゼントしてくれました。すぐに友だちにもらったマスクにつけてみました。とてもかわいくて、わたしのお気に入りになりました。ふつうのマスクよりつけるのもいやではなくなりました。友だちに会った時も、

「かわいい！　どこで買ったの？」

と聞かれました。うれしかったです。

アメリカにもどってきてかわいいマスクをさがしても、なかなか見つかりません。ざんねんです。友だちにもらったマスクを大切にしようと思います。

わたしは、今までこんなに長い時間マスクをつけたことがありません。でも、今は外に出るとたくさんの

5

人がマスクをしています。
コロナにうつらないように、
もうちょっとの間がまんして、お気に入りのマスクをつけていようと思います。

1

じてんしゃにのれない
Lエこう　一ねんーくみ
ふく　だ　あや
わたしは、このなつにできるようになりたいことがあります。それは、じてんしゃにのることです。ほんとうは、じてんしゃにのりたいわけではありません。
わたしのおにいちゃんとおねえちゃんが、
「じてんしゃはたのしいか

2

ら、のれるようになったほうがいい。」

というのです。それに、こどしはコロナウィルスのせいで、あまりでかけられませんでから、おとうさん、おかあさん、おにいちゃん、おねえちゃんのみんなにたすけてもらって、れんしゅうしています。

わたしは、小さいときにミりんしゃにのっていまし

3

た。

うしろに小さいタイヤのついたじてんしゃは、かってもらえませんでした。なぜかというと、ひっこしのじゃまになるからです。ロングアイランドにきてから、あおとピンクとくろのじてんしゃにのって、れんしゅうしています。

おかあさんとバックヤードでれんしゅうしたとき、たくさんかにさされて、ち

12×12

4

がでました。がゆくてかゆくてねむれなかったので、もうじてんしゃにのれなくてもいいとおもいました。でも、わたしのおともだちがじてんしゃでどこかへいったことをおしえてくれたり、じてんしゃにのっていたりしゃしんをおくってきたりするしゃしんをおくってきたいするとじてんしゃにのれないことが、とてもくやしくなります。

12×12

5

いまも、てをはなすとふらふらしてしまいます。それにとてもあつくて、あまりれんしゅうするきになれません。でも、あきになったらもっとれんしゅうしたくなるかもしれません。じてんしゃにのれるようになったら、一ねん一くみのおともだちと、こうえんにいきたいです。

12×12

蛙のゆかりちゃん

いこう一ねん四くみ

なかいりおこ

ゆかりちゃんはかわいい蛙です。わたしは六月に、森へ蛙をつかまえにいきました。蛙はいっぱいいました。わたしは蛙がいるのを見てうれしかったです。蛙は水の中にかくれるのが上手です。蛙は五ひきくらいいました。わたしがゆかり

ちゃんをつかまえたとき、
ゆかりちゃんはびっくりし
てジャンプをしていました。
水はきたなくて蛙も水とお
なじいろでした。わたしが
おうちにかえるときには、
ゆかりちゃんはおちついて
いました。おうちにかえる
とき、わたしはゆかりちゃ
んをすきになりました。ゆ
かりちゃんもなれてきて、
わたしのことをすきになり

ました。ゆかりちゃんのすきな虫は、くも、とんぼ、みみず、めだか、かまきり、かたつむり、ちょうちょ、はち、はえ、ばった、あぶ、とげじげじです。ゆかりちゃんはだっぴをするとき、ゆっくりおくちをぱくぱくさせます。おくちでかわをぬぎます。ゆかりちゃんの一ばんすきな虫はみみずです。いつもゆかりちゃんの

ために、おとうさんとおと
うとと虫をつかまえます。
ゆかりちゃんのたべかたは
おもしろいです。みみずを
ねらってちょうどいいばし
よにきたらとびついてチ
とくちでにげないようにし
て「ごっくん」とのみこみ
ます。そのあと「はーおい
しかった。」もっとたべた
い。」といっているようです。
やたしはゆかりちゃんをプ

12×12

ールに入れることにしました。ゆかりちゃんは上手におよいでいました。ゆかりちゃんは大たい大きいものをたべます。だからまい日うんちをいっぱいします。おそうじは大へんです。でもゆかりちゃんはかわいいので、そうじをがんばっています。ゆかりちゃんはわたしのたからもので、大すきなかわいい妹です。

12×12